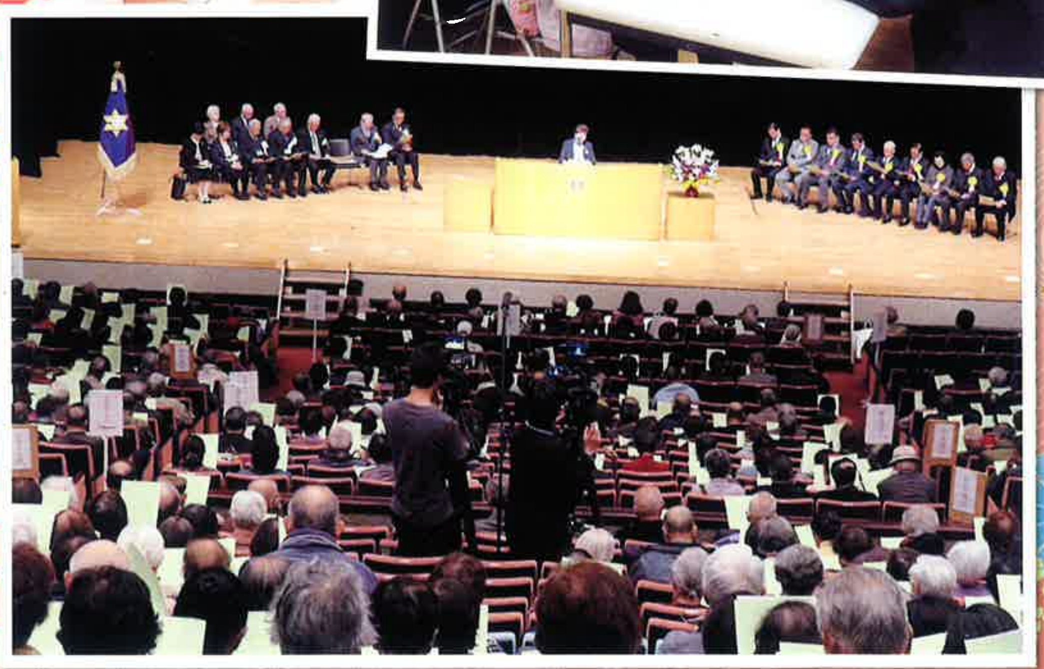
鹿老連

発行者
鹿沼市老人クラブ連合会
〒322-0043 鹿沼市万町931-1
TEL 0289-65-5191(呼)
鹿沼市総合福祉センター内
編集者
広報部編集委員会



会報96号発刊にあたって

鹿沼市老人クラブ連合会　会長　小島　正男

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、自粛生活が続いています。ステイホームということで自由な外出や活動が抑制され、人と人とのかかわりも少なくなる中で、認知機能の低下やフレイル(虚弱)を招きやすくなってきております。

4月24日の定期総会も残念ながら中止せざるを得ない状況となり、理事会で総会資料に基づき議事の承認をいただき決議の上、各代議員に「議案書」をお届けすることで総会実施に代えさせていただきました。

現在、感染拡大を防ぐために三密を避け、窓を全開にして、席は2メートル離し会議を開催させていただいております。

またマスクを着用しておりますのでマイクを使って大きな声での発言に協力をしていただいておりますが、声を出すことは高齢者の健康(心身)増進に役立つものと思っております。

今後も引き続き防止の徹底を図ってまいりますので、会員各位のお力をお貸しくださいますようお願い申し上げます。

さて、令和2年度は総会で承認された事業計画の方針に従い、目標達成のため全力を傾注して努めていきますが具体的な実践活動については、できるだけ内容の縮小に心がけ、時には書面により協議を行う形式での開催もあろうかと思いますが、新型コロナウイルスの感染防止の観点からご理解を賜りますようお願い申し上げまして、簡単ではありますが挨拶といたします。

（2020・6・30）

総務部

部長　鈴木　康子

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、鹿老連令和2年度定期総会も縮小して開催、各専門部会も5月に開催すべきが6月になり三密を避け開催しました。総務部は例年にならった事業計画を立てたが、単位クラブリーダー等研修会や親睦旅行等も、実行はまだ難しいところです。

今、取り組み始めた事業は今年初めての試みとして《詐欺防止電話戦術》で鹿沼警察署の生活安全課の協力を得て行いました。

これはすでに新聞紙上で、賑わしている詐欺事件です。私達高齢者はあの手この手で騙されキャッシュカードを渡したり、暗証番号を教えたり現金を渡してしまったり、毎日どこかで誰かが悲しんでおります。皆で電話や声を掛け合って悲しい事件に巻き込まれないための運動です。

鹿老連には約100人の役員(単位会長含む)がおります。一人の役員が3人に電話をかけ、その3人がまた3人に協力を戴きますと9人になります。その9人が3人にかけると27人になります。どこまで届くか分からないが一人でも多くの皆さんに届きますよう、マニュアルを載せておきますので皆さんも電話作戦の活動にご協力下さいますようお願い致します。

そして、安全で安心のまちづくりに参加しましょう。

その他総務部として計画されました行事は、その都度お知らせいたします。

詐欺防止電話戦術マニュアル

私たち老人クラブは、仲間が被害に遭わないように電話で声掛け運動をしています。

銀行員とか役所の職員と名乗ってキャッシュカードを確認してから封筒に入れさせて、封印をするので印鑑が欲しいと取りに行かせ、その間に用意していた封筒と取り換えてしまうという事例があるので、絶対に**「キャッシュカードは渡さない」**それから**「暗証番号は教えない」**ようにしましょう。

○○さんからお友達3人に伝えてくれませんか?あなたが3人に電話で伝えてくれれば次は9人になります。そういう活動なので○○さんもぜひ協力してくださいネ。お願いいします。

健康増進部

部長　武藤　義夫

令和2年度より健康増進部長を拝命いたしました。不慣れではありますが、会員各位のお力添えと協力を得て、精一杯仕事をさせていただく所存です。どうぞよろしくお願い致します。

新型コロナウイルス感染リスクの現状において、各行事が中止されている中、徐々に緩和された為当部の各行事は予定通り実施することとなりました。皆様方の多数の参加をお願い致します。体力測定については各協議会、クラブ単位で行って頂く方針です。

さて、今問題になっている「フレイル」(加齢にともなって気力や体力が徐々に落ちて要介護状態になる前の虚弱な段階)についてですが、予防とされる、運動、栄養、社会参加が重要だといわれています。鹿老連の会員は、多方面に渡って活動しており心配ないと存じます。その中で少しでも長く健康寿命を伸ばす為、人との交流、つながりを大切にし、一日一回の軽いストレッチ、そして歩く事を心掛け、継続していく努力が大切なのでできる限り実践していきたいと思っています。

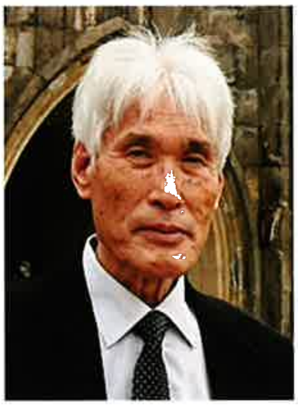
女性部

部長　並木　洋子

コロナ、目に見えない未知のウイルスで、日本中・世界中が恐怖と戦ってまいりました。真っ暗な出口の見えないトンネルの中からいつ出られるのかと誰もが心配したことと思います。関係者や国民の協力によりその甲斐あってやっと出口が明るみかけた感じです。最近では緊急事態も緩和され、私達もホッとしました。でもまだ手ばなしで喜べない状態です。大変な現状はまだ続きます。感染予防に心掛け、新しい生活様式が求められる中それぞれに対応できる老人になり、皆で力を合わせ明るく元気な日々を過したいと思います。女性部では先頭をきって、6月の26日に「出会いの森」運動公園野球場において、グラウンドゴルフ(GG)大会を行いました。参加者は61名で連合会の会長を招待し、天気にも恵まれ、のびのびと和気藹藹に楽しく無事終了することができました。本年度の女性部会に於いて、女性部長を選出しない協議会は、女性部の事業に参加できないことになり、一日も早い選出を宜しくお願いいたします。元気で楽しい女性部に参加、皆んなでお待ちしています。

広報部

部長　寺崎　尚美



本年度から広報部長として広報を担当することになりました北犬飼地区、つだ未来塾の寺崎です。入会4年目の新参者です。重責を担うことになりましたが、衆知をもって取り組んでいきます。

昨年、令和元年度県老連主催のいきいき大学18期生として入学しました。多種多様な講義を受け、”新しい知識と取り組む意欲“、大きな感化を受けました。講義を受けながら、一つだけ老人クラブが内包する大きな問題を知りました。会員数の減少と組織率の低下という由々しい問題です。

超高齢化社会といわれ、高齢化率と高齢者数は年を追う毎に増加しています。にもかかわらず、老

人クラブの会員数は減少し、組織率は凋落の一途を辿っています。本来、高齢者数の増加と老人クラブの会員数の増加は比例しなければなりません。ところが、現実に起きている現象は反比例です。組織のベースとなる会員数の減少は、見過ごすことのできない重要な問題です。

広報部会は、広報紙の発行を通して、老人クラブの存続をも左右しかねない会員数の減少問題に取り組み、問題解決の一助となるよう広報活動に努めます。

各位のご協力をお願いいします。

創作部

部長　髙橋　充

毎年恒例になっております鹿沼市老人クラブ大会並びに鹿沼市フェスティバルが、11月27日㈬・28日㈭に市民文化センターに於いて盛大に開催されました。作品展示会は１０６点の参加があり会場を盛りあげてくれました。令和２年度第35回、県老連作品展示会が８月25日㈫～27日㈭まで宇都宮文化会館展示室にて開催することになっていたが、新型コロナウイルスの影響により中止となりました。入賞者の皆様にとっては、ほんとうに残念です。

令和２年度の新しい年の高齢者フェスティバル、老人クラブ大会が令和２年11月３日㈫～５日㈭鹿沼市文化センター大ホールにて開催される予定になっております。

創作部といたしましては会員一人ひとりが創作活動によって「ゆとり・うるおい・やすらぎ」に満ちた生活になれればと願っております。

第35回栃木県老人クラブ連合会作品展への出展作品　入賞者
令和2年8月25日㈫～27日㈭

部門	金賞	銀賞
書　道	松永　教江（東部台地区）	田嶋陽之介（中央地区）
絵　画 絵手紙	小島　榮子（絵画）（北押原地区）	吉高神洋子（絵手紙）（北押原地区）
写　真	湯澤　忠男（南摩地区）	嶋田　久枝（南押原地区）
工芸・工作 彫刻・陶芸	鈴木　清樹（彫刻）（菜野地区）	高山　茂（工芸）（東大芦地区）
手　芸	福田　サト（北押原地区）	佐々木留美（東部台地区）

地区だより

北部地区

笑顔で楽しく元気をモットーに
上田町ハッピークラブ

会長　浅見　照正

鹿沼市の中心部の上田町ハッピークラブ　会員数45名。

月一回の事業を目標に、「楽しい」を合言葉に皆でがんばっております。

１月は新春もちつき大会。皆でもちをつき、あんこ、きなこ、大根おろしもちを作り新年会。

春は枝垂れ桜の観賞、夏は流しそうめんの昼食、秋は紅葉の散策、間の月は健康体操、皆で歌おう、バンドに合わせて楽しく歌うカラオケ大会、グラウンドゴルフ、パターゴルフ、輪投げ大会と、皆で楽しんでおります。

町内を三グループに分けて、輪番制で事業を計画し、実行しております。また女性の方に三名から四名のグループを作り順番にお茶当番をお願いしております。

元気で楽しくをモットーに、今後も私達が楽しみながら、健康寿命を延ばし、地域に貢献できるようなクラブを作っていきたいと思っております。

北犬飼地区

十年が経ちました

北犬飼地区松原シニア会　会長　関口　勝男

当「松原シニア会」が生まれてから、この春でちょうど10年になりました。

この原稿を書き出したときに、それに気付いたということで、これまで数えたこともなかったのが正直なところです。その事に気付いていた方も、多分いらしたかと思いますが、どなたからもその事を聞いたことはありませんでした。せっかくの"10周年"が、知らず知らずに通り過ぎてしまいました。これも"新型コロナ"のせいでしょうね(笑)

発足以来、会員数60名前後で推移していますが、約800世帯の高齢化した団地の「老人クラブ」としては、いかにも少ないと思います。当会の方針で「来る者は拒まず、去る者は追わず」の姿勢で、強引な勧誘は慎むようにしているせいかも知れません。

政治や宗教の団体でもなく、いわば「高齢者のサロン」ですから、正直なところ、現状が"適正規模"と思っています。しかし、クラブ活動や行事・催事には、員外の皆さんにも声をかけて参加していただいています。町内では、それなりの存在感はあるのではないかと自負しております。

菊沢地区

陶芸体験で益子の歴史と文化に触れる

菊沢地区老人クラブ連絡協　参与　黒川　栄三

千渡と玉田で組織する菊沢地区老人クラブ連絡協議会（大貫幸夫会長）は令和元年10月17日、益子町で施設見学会を開いた。シルバー講座の見聞を広げる恒例行事で、会員ら計41人が参加した。

最初の目的地・益子陶芸倶楽部にバスで到着した一行は、直ちに陶芸体験に臨んだ。会員は素焼きの湯飲みと皿に分かれて絵付けに挑戦。専門家や修業中らしい米国の若者たちの指導で、好みの芸術品に仕上げ、にわか陶工の気分を味わった。作品は、本格的に窯で焼かれ、後日、立派な記念品として各自に配られた。

益子焼は江戸時代末、隣接の笠間焼を学んだ大塚啓三郎が窯を築いたのが始まりとされる。当初は鉢、水瓶、土瓶など日用品の産地として発展するが、柳宗悦と「用の美」に着目した陶芸家の濱田庄司が大正時代に移住、民芸運動を推し進めたため、地元陶工にも影響を与え、芸術性の高い民芸陶器として定着した。現在、窯元は二百五十を数え、陶器店も多い。

参加者は陶芸メッセ・益子を訪れ、敷地内に移築された濱田の旧宅や生前愛用し、後に復元された

陶芸メッセ・益子で記念撮影する参加者

真剣な表情で湯飲みや皿に絵付けする会員たち

登り窯などを興味深そうに見て回り、陶芸の里を満喫した。また、日下田藍染工房では第二百年超の建物を見学、広重ブルーの作業工程の説明を受けて、藍染文化の歴史や伝統の重みに触れた。

ところで、文化庁は今年６月19日、同町と茨城県笠間市が共同申請中だった「かさましこ～兄弟産地が紡ぐ〝焼き物語〟～」を令和２年度の日本遺産に認定した。翌日付の新聞報道で知った。二つの焼物は信楽焼の流れをくみ、兄弟関係にある。両産地にとって、この決定は大変な朗報になろう。

地域の特色や歴史、文化財等を織り込んだストーリーを認定する制度だ。両市町は、これを機に共同で陶芸の魅力や歴史を全国に発信し、販路拡大を目指すという。

新型コロナ禍の新時代を迎え、当地を訪ねた同郷人として、今後の動向を見守りたい。

北押原地区

世代交流事業グラウンドゴルフ大会

北押原地区村井町福寿会　会長　斎藤　幸作

世代交流事業の一環として、北押原中学校の生徒と北押原地区老人会との合同グラウンドゴルフを行いました。毎年の恒例行事となっており、今年の参加者は中学生20名、老人会20名と主催者であるスマイル会員の６名が参加する大規模な催しとなりました。

生徒達は皆グラウンドゴルフ初挑戦ということで、クラブも握ったことも打ったこともありません。最初は苦戦している様子でしたが、やはりそこは伸び盛りの中学生です。少しコツを掴むと簡単に遠くに飛ばせるようになっていき、ホールインワンをする生徒まで出たのには驚きました。上達していく中での生徒たちの笑顔はとても良く、老人会としてもたくさんの元気を貰い、楽しく参加することができました。

グラウンドゴルフ後には、老人クラブ役員による雑炊が振る舞われ、とても寒い日であった為、生徒たちも大喜びでたくさんの笑顔が見られました。

今年のグラウンドゴルフ大会もけが人を出すこともなく、大盛り上がりで終えることができました。このような刺激のある催しは、来年以降も続けていけたらと切に願います。

東大芦地区

引田悠遊クラブの活動について

引田悠遊クラブ会長　上沢　登

私たちのクラブは、現在29名の会員で活動しています。

年間の事業としては、まず６月に花植栽を行いました。年間３回の再資源回収も６月、９月、２月に行っています。また、引田石村神社境内の植木の手入れ及び清掃を年３回実施しています。

会員の皆様におかれましてはゲートボール及びグラウンドゴルフの練習をとおして健康増進に努め、親睦を深めております。

また、引田悠遊クラブの毎年の楽しみであります年2回の一泊旅行を予定しておりましたが、先日の役員会の席上本年度は新型コロナ関係で一回目は計画が中止となりました。次の旅行の計画を楽しみに考えているところです。新型コロナ関係で先が見えませんが、一日も早く普段の日常生活に戻ることを願っております。

会員の皆様には大変お世話になっており、諸活動のご協力に感謝いたしております。これからも仲良く楽しくやっていこうと思っております。

西大芦地区

事業への参加及び交通手段のむずかしさ

西大芦老人クラブ　会長　福田　勝枝

西大芦老人クラブは、4単位、会員数49名で構成されていますが、年々減少の一途を辿っています。各単位の会長は、未加入の方に入会をお願いするが、「NO」の一言。中には現役時代の職場の地位へのこだわりがあるように思える人もいる。何故？と疑問に思う。

そんな少数の中で、事業への参加とそれに伴う交通手段の確保も難しくなってくる。

送迎をお願いするのも躊躇、「もしもの事があったら誰が責任をとるのか」等々考えてしまう事も事実です。

スポーツ大会においては、参加できない理由として「足や腰が痛い」「暑さに耐えられなかった」などが理由のようでした。

今後は無理をせず、仲間との交流を楽しみながら、生涯現役を目指して地域に貢献できる老人会でありたいと願うものです。

粟野地区

健康長寿を目指し　仲良く・楽しく・元気よく

なか町八千代会　会長　小曽戸　廣

当会設立は54年前、旧粟野町の中心地域、先輩たちのご活躍と比し現状の活動は、実に寂しく、恥じ入る限りですが、写真と共に少し紹介します。

活動資金の捻出に資源ごみ回収団体となり市よりの報償金（現在回収重量kg単価4円、もっと値上げを望みたいが）は楽しみの一つ。

この資金での日帰り旅行年二回は比較的会員に人気あり。

現会員28名、当会の弱さは、各種スポーツ大会への参加が皆無なこと。種々話し合いの結果、年一度のふる里あわの夏祭り（盆おどり大会）参加を決め5年前から連続参加中。

残念なのは、今年は、コロナで中止。なんとしても感染再拡大は回避したいですね。祈るのみです。

第九回あわの盆おどり　2016.8.14

鹿沼の歴史こぼれ話　第１回

鹿沼史談会　福田　純一

屋台彫刻を彫った人々

鹿沼の歴史に関する様々なエピソードを紹介したいと思います。初回は彫刻屋台についてです。

今宮神社祭の付け祭りに繰り出される屋台は「動く陽明門」とも呼ばれ、豪壮華麗な彫刻で知られていますが、この彫刻を彫った人々については意外と知られていません。そして「東照宮を作った彫師が、冬に鹿沼に降りてきて屋台の彫刻を彫った」という話がよく語られます。

しかし、東照宮の造営は寛永年間（一七世紀前半）で、現存する彫刻屋台の建造は文化年間（一九世紀初頭）以降ですから、二百年近い開きがあります。屋台の彫刻を実際に手掛けたのは、富田宿（現在の栃木市大平町富田）の磯部一門という彫師集団です。磯部一門は下野国だけでなく、広く関東一円の寺社や屋台などの彫刻を手掛けていました。

仲町や上田町屋台の彫刻を手がけた磯部一門の後藤周二正秀は、文政元年（一八一八）に再建された東照宮五重塔の彫物方棟梁を務めています。こうしたことから、前出の伝承が生まれたのではないでしょうか。

コラム　備災のすすめ

防災や減災は、よく耳にする言葉です。『備災』はいかがでしょうか…？馴染みのない言葉のように思います。文字通り、災害に備えることです。

江戸時代後期の安政年間（１８５４年～）、いまから１７０年ほど前に大地震が多発しました。〝安政の大地震〟です。いま、日本列島は、その頃と同じように地震の活動期に入り、災害のリスクが高まっていると言われています。阪神淡路大震災をはじめ、３・11、熊本、等々…、各地で大きな地震が発生しています。のみならず、台風や梅雨前線による大雨と洪水、そして竜巻、加えてコロナ禍と、想定を超える事態が頻発し、いまや日本列島は災害の巣窟となっています。

災害に備えること、『備災』は、私たちが早急に取り組まなければならない課題です。大切な家族を守るのは、高齢者です。高齢者こそ積極的にその役割を担いたいものです。『備災』という言葉を心に留め置き、身を守る行動の一つとして取り組んでみてはいかがでしょうか。

善は急げ、いますぐ備蓄からはじめてみませんか…？詳しくは総務省、消防庁のサイトをご覧ください。

（寺崎）

文芸欄

◆短歌◆

緑陰に汗ふきおれば清清と谷よりの風うぐいすの声
清洲　深程スマイル会　島村キミ子

友の詠み描きたるくちなしの白き花過ぐれば香りが我が歩みとめる
清洲　深程スマイル会　大貫　春江

紫陽花のいろとりどりのクッションに小蛙跳ねる雨の上がりて
北犬飼　つだ未来塾　松本　洋子

◆俳句◆

青田風隣りあわせの休耕田
北犬飼　松原シニア会　栗山　幸枝

湿原に紅をさしたる山躑躅
北犬飼　松原シニア会　佐藤　謙二

銭葵虚しく活けて客を待つ
北犬飼　松原シニア会　関口　勝男

編集後記

今年に入り、コロナ禍という想定外の事態が発生しました。三密、ソーシャルディスタンス、テレワークと…、世情は一変しました。

先日、宇都宮の駅前交差点で信号待ちをしていました。何気なく周囲を見渡すと、それぞれがマスクをして２メートルほどの間隔を取り、当たり前のように信号待ちをしていました。いつの間にかソーシャルディスタンスは、常識になっていました。まさにコロナ維新、何もかもが変革する新しい時代の到来、予兆を感じました。

コロナ感染症の予防のために、物理的な距離をとることは仕方ありませんが、〝心の距離〟までとるようなことがあってはなりません。心の距離は、より一層短くするよう努めなければなりません。これからの老人クラブは、〝絆〟という心を繋ぐ活動が強く求められるような気がします。

（寺崎）